

本間みち代

チェンバロリサイタル

モダン
チェンバロ
のために



2009年11月2日(月) 18時半開場 19時開演 杉並公会堂・小ホール

PROGRAM

— 鈴木 治行 —

梶円 *for harpsicord* (1999)

Kalmia for harpsichord (2005) 委嘱初演

Perception II for harpsichord and electric sound (2009) 委嘱初演

— リュック・フェラーリ —

Programme commun pour clavecin et bande (1972) 日本初演

— 下山 一二三 —

STRATUM for CEMBALO (2006~2007) 委嘱初演

— モーリス・オアナ —

deux pieces pour clavecin

Wamba (1982)

Conga (1983)

— マリウス・コンスタン —

SILETES pour clavecin (1973)

モダンチェンバロについて

モダンチェンバロは、18世紀以来、長く忘れられていたチェンバロをポーランドのチェンバロ奏者ワンダ・ランドフスカとフランスの歴史あるピアノ製作会社ブレイエル社との共同開発で復興させたものです。1912年、プレスラウ音楽祭でお披露目されました。モダンチェンバロの誕生です。およそ100年前のことです。それは2段鍵盤で、鉄骨製フレームが使用されたモダン・チェンバロでした。

近年、日本、韓国、ベトナムなど東洋の作曲家にも注目され、オリジナル作品は増えつつあります。

モダンチェンバロは1つの音に8フィート2本、4フィート1本、16フィート1本の合計4本の弦、2つのリユーストッブを有し、ペダルと手で操作することのできるような音色を作ることが可能な楽器です。レジスターの切り替えは足で行うので両手の動きを妨げることなくスムーズに音色の変化や強弱をつけることができます。この会では音の組み合わせの可能性とその魅力を最大限に引き出している作品を集めてみました。今回のプログラムはすべてモダンチェンバロのために書かれた作品で構成しました。モダンチェンバロの様々な表情をお楽しみいただきたいと思います。

本間みち代

『楳円』(1999)／『Kalmia』(2005)／『Perception II』(2009)

僕がこれまでに書いたチェンバロのための曲は4つあるが、すべて本間みち代さんによって委嘱、初演していただいている。今回のプログラムには、『句読点 VI』を除く3曲が入っている。

まず、初めてチェンバロという楽器で作曲した作品である『楳円』、これは90年代頭以来今日まで継続している反復的な作法による作品。細部は忘れたが、同じ(または同じ「ような」)パターンが不規則に回帰する構造を、惑星などの楳円形の周期運動にたとえて名付けたのだろう。この方向の作品での関心事を簡単にまとめると、記憶に引っかかるパターンが回帰することで時間が分節され、そこに形式感が生じる、その認識の作用をコントロールすることによって新たな時間体験を創出できるのではないか、ということである。

2曲目の『Kalmia』は、作曲されたのは4年前だが今夜が初披露となる。元々は本間さんの当時中学生だった娘さん、聡子ちゃんのために書いた曲で、つまり子供用の音楽なのだが、できあがってみるとそれにしては難しすぎたかもしれないと思う。当時聡子ちゃんの演奏は子供とは思えないくらい上手だった印象があったので、ついハードルを高くしてしまったのだろう。この作品は、調性音楽などの仕事を除けば、僕にしては珍しくコンセプト、システム一切なしの全く感覚的に作った音楽で、こういうのはかなり珍しい。なんでこのタイトルにしたのかは全く思い出せない。

最後に今回のリサイタルのために委嘱していただいた新作『Perception II』である。これは、路線としては『楳円』と同じ反復ものののだが、電子音とチェンバロのために作られていることによって、音楽の焦点は他の反復ものとはだいぶ異なってきた。同じ(ような)パターンが回帰するのだが、それが生のチェンバロで弾かれるか、電子音に担われるかがその都度異なっており、またはまだら模様にはシェアされていたりする。その分担の割合はチェンバロ0%／電子音100%とチェンバロ100%／電子音0%の間を振り子のように揺れ動く(*例えば、「チェンバロ0%／電子音100%」とは生演奏なしの全く電子音のみの状態ということになる)。両者のまだら模様を厳密にやろうとすれば、途方もなく困難な様相を呈してしまうのでそれは避け、電子音とチェンバロの合わせは比較的ラフにしてある。そのことによって、絶えず生じるいくらかの誤差が同じようだが同じではない擬似的な反復を生み出すだろう。タイトルは1990年の電子音楽『Perception』から来ているが、これは素材の音響的な類似故だ。ちなみにこの元の『Perception』は、「反復もの」へと確信を持って踏み出すきっかけとなった自分史上重要な作品。余談だが、ときどき現れる声はリュック・フェラーリの初来日時のトークの録音で、秘かにオマージュを捧げている。本間さんとの出会いがなければこれらのチェンバロ作品は生まれなかったもので、つくづく出会いというものの貴重さに思い入る次第である。改めて本間さんに感謝致します。(鈴木治行)

鈴木 治行(1962～)

芸術ジャンル固有の領域を固守する意識が全くなく、かといって音楽から離れる気もなく、それ故にこれまでにコンサート作品の作曲以外に映画、美術、演劇などとのコラボレーション、および芸術全般の批評活動を行ってきた。1995年、『二重の鍵』で第16回入野賞受賞。

『Programme commun pour clavecin et bande』(1972)

この作品は18分を超す超大曲です。いくつかのアイデアが書き記されただけの楽譜で、奏者が自由に選び組み合わせます。そこに書かれている条件は電子音に合わせることだけ。電子音の方は音の大小はありながら最後は夜の森の中の様子になっていくのです。夜の森の音、夜のコオロギの声、夜の静けさ……。 (本間みち代)

Luc Ferrari (1929～2005)

フランスの作曲家。とりわけテープ音楽の旗手として名を残した。パリ国立高等音楽院にて、ピアノをアルフレッド・コルトーに、楽曲分析をオリヴィエ・メシアンに、作曲をアルテュール・オネゲルに師事。初期作品は自由な無調音楽であった。1958年にピエール・シェッフェルやフランソワ＝ベルナル・マッシュらとともに「音楽研究集団」を旗揚げする。世界中で教鞭を執るかたわら、映画音楽や劇場音楽、ラジオ音楽を手懸けた。1960年代初頭までに、「エテロジゴート H師屍 ozygote」の創作に取り掛かる。これは、「組織化されて詩的な、しかしながら物語性を指向しない」環境音を用いた、磁気テープのための作品であった。録音された環境音の利用は、フェラーリの音楽語法の特徴的な部分となっている。フェラーリは、テープ音楽の創作ばかりでなく、純粋な器楽曲の作曲も続けていた。またメシアンやカール・ハインツ・シュトックハウゼンら、現代音楽の作曲家のリハーサル風景をドキュメンタリー映像に収録して残した。

『チェンバロのための「ストラータム」』(2006～2007)

Stratum(ストラータムあるいはストレータム)とは地層のこと。粘土などが幾重にも重なっている状態をいう。この作品ではアルペッジョが頻繁に出てくるが、その重複の関係が地層の重なりを連想させるところからstratumを題名にしている。(下山一二三)

下山 一二三(1930～)

青森県弘前市出身。1945年の第二次世界大戦終戦が一つのきっかけとなり、音楽を独習し始める。青森県立弘前高等学校卒業、弘前大学卒業。大学卒業後の1955年に上京し、松平頼則に師事。1956年「グループ20.5」を結成、第1回作品発表会を開く。1961年の第6回でグループを解散。1969年、ISCM主催世界音楽祭(ハンブルク)に「3群の弦楽オーケストラのためのリフレクション」が入選。1979年、文化庁主催芸術祭で「管弦楽のための彩響」が芸術祭優秀賞受賞。1992年「6人の奏者とテープのための風紋V」が「ワルシャワの秋92」で世界初演。2001年、ISCM主催「World Music Days(横浜)」に「深響」が入選するなど、多数の受賞を受ける。

『Wamba』(1982)

1982年、エリザベート・ホイナツカのために作曲され、初演された。ワンバとは西ゴート族の王が7世紀にトレドで王位についた時、ガリシアの教会に献納した鐘のことで、鐘の音を模した音型が曲中に次々と現れる。(Maurice Ohana)

『Conga』(1983)

キューバ及びアフロ・キューバ起源のダンス「コンガ」。祭式と狂乱のリズムへの賛辞。この曲は、打ち続けられるコンガのリズムとそれを突然さえぎる何か(人か動物か)の叫び声で構成される。遠くに近くに聞こえる様々な音群がしだいにリズムのエクスタシーへと登りつめていく。(Maurice Ohana)

Maurice Ohana (1914～1992)

モロッコ・カサブランカ生まれのフランス人作曲家。アラブ、スペイン、ユダヤ人の混血(母方がスペイン人)。1932年にパリへ進出。建築学を学ぶ傍らラザール・レヴィ(Lazare Levy)にピアノを師事。次いで1937年から1940年まで、スコラ=カントールムへ進んでダニエル=ルシュールに和声法と対位法を師事した。大戦中は英軍兵士として従軍し1944年までエジプトおよびアフリカ戦線を転戦。戦後、1946年にはパルセロナの聖セシユ音楽アカデミーに入学し、アルフレド・カゼッラに師事して研鑽を積む。1947年の帰仏後は生涯をパリで送った。1969年にイタリア賞、1982年にオネゲル賞、1985年にラヴェル賞を受賞。死後にSASEM賞も授与されている。

『SILETES *pour clavecin*』(1973)

12,13世紀の祝祭の時の「ゲーム」や「神秘劇」の最中、その監督は、集まった群衆のムードに目を光らせていた。もし、群衆が退屈して、なかば眠っているときには、彼は劇を中断し楽士たちに「SILETES」として知られるうるさくて耳障りなファンファーレを奏でさせ人々の目を覚ました。そしてまた劇は続けられた。(Marius Constant)

Marius Constant (1925～2004)

1925年、ルーマニア出身のフランスの作曲家・指揮者。パリ音楽院にてオリヴィエ・メシアン、ナディア・ブーランジェ、アルテュール・オネゲルに学ぶ。1963年に現代音楽アンサンブル・アルスノヴァを設立。1978年より1988年までパリ音楽院で教鞭をとる。1993年よりメシアンの後任としてフランス美術院アカデミー会員に就任した。彼はローランブティヤやモーリスベジャールのバレー音楽を手がけている。本来は現代音楽の作曲家だが、テレビ番組の伴奏音楽や映画音楽で知られており、とりわけ「トワイライト・ゾーン」のテーマ音楽が名高い。

本間 みち代

上野学園大学古楽器科チェンバロ科卒業。山田貢氏にヒストリカル・チェンバロを、またモダン・チェンバロの第一人者であるエリザベート・ホイナツカ氏にモダンチェンバロの奏法についてアドバイスを受ける。第7回パリ国際クラヴサンコンクールで現代曲部門奨励賞を受賞。その後、チェンバロの現代音楽の作品を数多く紹介し続けている。1989年、韓国で行われた現代音楽祭「バン・ムジーク・フェスティバル」にてリサイタルを行う。(ソウル・アート・センター)。また97年にもISCM World Music Day'sに出演。1995年、ポーランド放送局の招きにより、「ヴォジミエシユ・コトニスキ氏の70才記念コンサート」に出演する。NHK「土曜リサイタル」でモダンチェンバロの作品を紹介。平成12年度第55回文化庁芸術祭に参加。2008年にはデンマークの現代チェンバロ作品のレコーディングをし、リリース。